

特集 2. 決定版！高断熱・高气密が浸透しない本当の理由

## 最終回 低断熱・低気密住宅への愛着\*\*

平成 20 年 12 月 12 日

### □ 場所への愛着

ふるさと、わが町、わが家、母校。こうした環境に対して、われわれは何となく「落ち着く」、「くつろげる」と感じたり、他所とは違った強い結びつきを感じたりします。

このようにヒトは、日々の生活を通じて、場所、空間に対しても、家族の間に生まれるような感情的な強い結びつきをつくりだしていくのです。このヒトと住環境との間に生まれる肯定的で感情的な絆、つながりのことを「場所への愛着」(place attachment) といいます。

### □ 愛着と環境評価

「場所への愛着」が生まれれば、当然その環境に対する評価は、肯定的なものになってしまいます。もちろん、このことは従来型の低断熱・低気密住宅にも当てはまります。

住居	多くの人がいまだに従来型の低断熱・低気密住宅に住んでいる
↓	
愛着	現在の居住環境に対して「愛着」が生まれ、肯定的な感情をもってしまう
↓	
結果	「低断熱・低気密でも特に問題ない」と考えてしまいがちになる

とはいえ、低断熱・低気密住宅は、決して良好な環境ではありません<sup>†</sup>。はてして、このような快適性の劣る環境にも、ヒトは愛着をもつことができるのでしょうか。

結論を先に言えば、十分可能であると考えられます。なぜなら、「場所への愛着」には、「母子間の愛着」と共通したある特徴があるからです。それは、打算的な絆ではないという特徴です。

\*\* 初めて記事をご覧になる方は、必ず「[利用規約](#)」をご確認ください

<sup>†</sup> 前回の「[第2回 低断熱・低気密でも慣れるんです](#)」で取り上げた農村住宅の例を参照。

## □ 愛着の理由

実は、ある実験が行われるまで、母子間の絆は、欲求（空腹）と報酬（授乳）に基づいたものであると考えられていました。つまり、赤ちゃんは、授乳によって空腹を満たしてくれる人になつていくと考えられていたのです。

しかし、こうした考えは Harlow<sup>1)</sup> の実験によって否定されました。彼は母子間の愛着形成には授乳することよりも、むしろ、「温かい肌のふれあい」や、たえず「身体接触」をとることの方が重要であることを示したのです。

### 【母子間愛着の特徴】

1. 欲求－報酬という打算、計算だけで説明することは難しい
2. スキンシップによる安心感など、**愛着の根源はむしろ情緒的なものである**

## □ 場所への愛着も打算ではない

こうした特長は、「場所への愛着」にも当てはまるといえます。このことは以下にあげる調査結果からも推測できます。

Omata<sup>3)</sup> の調査では、「趣味に合ったもの」などが置かれている部屋など、自分らしさがよく表れている部屋ほど、その部屋への愛着が強いことが示されました。

また加藤の調査<sup>2)</sup> では、これ以外にも様々な愛着の理由が浮かび上がりました。注目すべきは、その多くは「落ちつく・くつろげる等」の**情緒的安定に関わるもの**だったのです（右図参照）。

さらに興味深いことには、どちらの研究でも、「住宅性能が良いから」、「プランが素晴らしいから」など、住環境の性能の良さを、愛着の直接的な理由としたものはほとんど無かったのです。

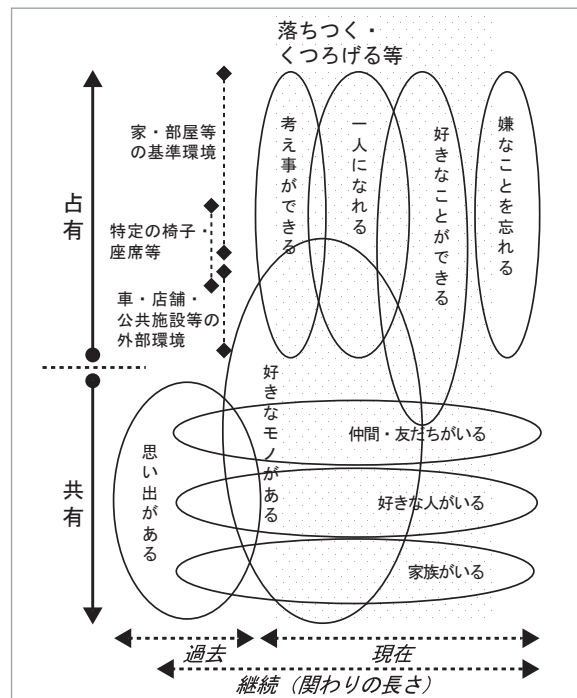


図1 場所に愛着を感じる理由のモデル<sup>2)</sup>  
調査結果より、場所との関わりを横軸、占有-共有の度合いを縦軸に、愛着の理由をモデル化

## □ 性能は愛着の根源ではない

これらのことからすると、快適性や機能性の劣る住環境でも、例えばそこに「家族がいて」、「好きなモノがあったり」すれば、情緒的な安定が得られ、「愛着」が生まれる可能性が十分にあるのです（図1参照）。

もちろん、快適性が劣るといことは大きなマイナスです。しかし、こうした環境に対しても、生理的な適応や、暖房をするなど文化的な適応が行われるのです。また、「慣れ」(habituation) が生じてしまえば、こうしたマイナスも、次第に重要でなくなっていくのです。

とすれば、低断熱・低気密環境に対する評価も「場所への愛着」の影響によって、さらに肯定的になっていくことが十分に予想されるのです。

## □ まとめ

「慣れ」や「場所への愛着」。これらの要素は、生理・心理現象の中でも特に数値化（定量化）困難な要素です。しかし残念ながら、このように客観的に測定・操作することが困難な要素は、現代の建築技術では軽視、あるいは無視されてしまいます。

とはいえ「慣れ」<sup>†</sup>や「愛着」は、確実にわれわれの住居観に大きな影響を与えるのです。「慣れ」や「愛着」の影響を受けた価値観、既有知識。つまり、こうしたものを参照しながらわれわれは物事を理解しようとしているのです。

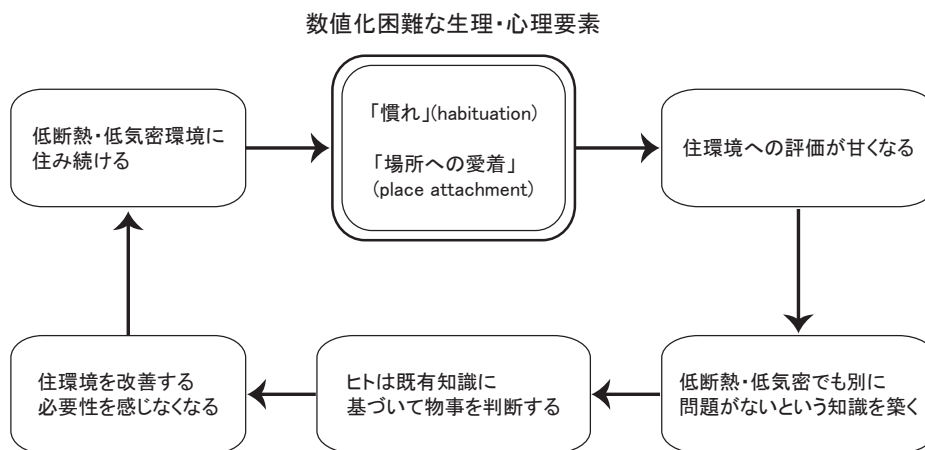


図2 日本で高断熱・高気密化が進まない理由

そのため、「慣れ」や「愛着」の影響によって、「低断熱・低気密でも問題がない」という価値観、

<sup>†</sup> 「慣れ」が私たちの既有知識に与える影響については、第2回「[低断熱・低気密でも慣れるんです](#)」を参照。

知識をもってしまえば、たちまち、高断熱・高気密化の利点、特徴が理解できなくなってしまうのです。そして、図 2 のような悪循環に陥ってしまうのです。

ではどうすれば、このような悪循環を断ち切ることができるのでしょうか。この点については、紙面の都合上、別の特集で解説していきたいと思います。その特集のキーワードも、やはり「**既有知識**」(スキーマ)になる予定です。

\*記事の感想をお聞かせください

[アンケート画面へ](#)

## 謝辞

論文<sup>2)</sup>の詳細についてご教示いただきました加藤智宏氏に深謝いたします。

## 参考文献

- (1) Harlow, H. F.: “The nature of love”, *American Psychologist*, **13**, 673–685 (1958).
- (2) 加藤智宏: “愛着のある場所に関する研究～愛着を感じる理由からの検討～”, 日本心理学会第 67 回大会発表論文集 (2003).
- (3) Kenji, O.: “Territoriality in bedroom and its relations to the use of room and psychological independence in japanese adolescents”, *Journal of Home Economics of Japan*, **46**, 8, 775–781 (1995).
- (4) 園田美保: “住区への愛着に関する文献研究”, 九州大学心理学研究, **3**, 187–196 (2002).
- (5) 小俣謙二(編著), 天野寛, 河野和明: “[住まいとところの健康](#)”, プレーン出版 (1997).

---

【寄付歓迎】当コラムは無料ですが、ご寄付は歓迎します。詳しくは[ご支援依頼](#)をご覧ください。